

論文

スポーツによるアクティブラーニングプログラム開発 ～奥能登被災地復興支援活動の事例報告～

宮崎 純一

キーワード

社会課題
アクティブラーニング
スポーツ

目次

- はじめに
 - 大学におけるスポーツによる社会課題への取り組み
 - JFA 被災地支援ウォーキングフットボール事業とボランティア活動
 - 大学生アスリートと教職員による「スポーツ被災地復興支援活動」の実践
 - 活動に向けた現地視察
 - 活動実施に向けたマネジメントチーム作り
 - スポーツによる復興支援活動「キッズスポーツチャレンジ」と学び
 - 避難所訪問「炊き出し」と被災地視察
 - まとめ
- 謝辞
参考文献
フィードバック資料

1 はじめに

2022 年より学院内にて、スポーツによる社会課題への取り組みを継続してきた「オール青山スポーツコミュニティ・プロジェクト^{*1}」は、2025 年 3 月に能登半島沖地震被災地復興支援活動を実施した。活動には大学生アスリート、学院内教職員を中心に組織した 24 名が参加した。なかでもコーディネーターおよびファシリテーターとして、この活動を推進した角田寛和氏の役割は多岐に渡り、後述するが本活動の発起、運営、実践には感謝の意を表する。3 年間にわたり学内で培ってきた「スポーツによる社会課題への取り組み」のスキームを被災地復興支援という形で学外に提供する機会となった。これまで年間に夏冬 2 回ずつ青山キャンパスと相模原キャンパスにて実施してきた「オール青山キッズスポーツチャレンジ」を実施した。これは小学生を対象として保護者も参加可能なマルチスポーツ体験イベントである。青学トップアスリートが各種目ブースを設定して、参加者が 20 分から 30 分ずつスポーツチャレンジする人気企画である。被災地の事前視察と現地自治体、民間ボランティア団体との調整に加え 1 か月間に及ぶ運営学生、学生アスリートによるオンラインミーティングを重ねる中で、被災地の現状把握、活動の目的、効果的な運営方法の十分な共有が必要となった。さらに、実施に向けて関わる学生だけではなく所属するクラブや友人、学部の仲間たちにも「被災地の今」の認識を促し、共に支援する気持ちを共有する「被災地を伝える支援」を広げる努力を継続した。現地における活動は 3 日間と限られており、その時間と資源をいかに有効に活用するかを学生たちと共に思いを馳せる有用な準備期間となった。2025 年 3 月 7 日（金）～9 日（日）に、奥能登地域の輪島市、珠洲市、能登町にてスポーツによる復興および被災地視察、避難所訪問と炊き出しを実施した。運営指導に関わった学生たち 14 名、教職員及び指導スタッフ 10 名は各々の役割を果たし被災地復興のために 3 日間を過ごした。現地で時間を共にした 200 名を超える参加者の皆さん、自治体職員、民間ボランティア団体の皆さんからは多くの笑顔と感謝の言葉、励ましの言葉を頂いた。短い期間であり、決して多くの成果を提供したとは言えないが当初の目的である「スポーツによる被災地復興支援活動」は現地、奥能登地域で暮らす皆さんに学生たちの想いを届けることが出来たと実感している。

本来は、このような情動的かつ主観的な評価ではなく客観的データを多角的に収集し、その成果や有用性を分析し、考察が必要とされる。本研究においては「活動における一定の成果」が確保された前提で企画、運営に携わった学生の教育的有用性を評価することに着目する。したがって、この活動に関わった大学生アスリート、運営学生のスポーツマネジメント、スポーツアントレプレナーシップに関わる学びを行動観察、フィードバックレポートから評価し、活動の教育的効果や有用性を考察することで、アクティブラーニング教育プログラムとしての更なる発展を提案することを目的とする。

2 大学におけるスポーツによる社会課題への取り組み

幅広い年齢層において心身の健康を獲得するための施策は少子高齢化社会に備えるための重要な社会課題といえる。2010年文部科学省の示した「スポーツ立国戦略」とこれに続く翌年の「スポーツ基本法」の制定により、欧州に倣い国家的プロジェクトとしてスポーツに取り組む施策が開始された。新たに制定されたスポーツ基本法には、全ての人にスポーツの楽しみを享受する権利が保証され、競技スポーツにおいては国際大会招致に際する行政支援などが明記され、スポーツ活動の推進は長期的な国家行政課題として認識されることとなった。スポーツを通して健康の維持増進、体力増強に加えてスポーツコミュニティによる社会的なつながりを形成することにより心身の健全な維持発達を促すこととなる。核家族化、IT主導社会がもたらす多くの社会課題に対して、これらを解決する有効な施策として期待が寄せられた。「する」、「みる」、「支える」スポーツを通じて新たな視点からコミュニティが醸成されることへの期待がよせられる。本学においても、この指針を受けて学院内のスポーツ施設およびスポーツ関連人材を大学資源ととらえ、地域創生に還元する活動を既報^{10,12)}の通り実践してきた。

また、スポーツによる地域貢献は、人々の主体的かつ自主的な実践が肝要であり、これらの行為はソーシャル・キャピタルを生み出し、スポーツコミュニティへの参加者がその担い手となることを期待している。近年では、2015年に採択された「2030年を目標年次とする持続可能な開発目標（SDGs）」において、“Good health and well-being”が目標の一つとして設定された。健康の獲得とウェルビーイング促進は、両翼として持続可能な目標として期待される。既報ではウェルビーイング・コミュニティを創生するためにスポーツが担う役割や有用性を報告^{8,9)}した。これに続いてコミュニティを基盤とした日常において、対面で交流することの有用性や価値を見出し、ウェルビーイング・コミュニティ創生に向け本学においても社会連携機構を中心とした多くのスポーツ活動¹¹⁾が発足した。

2022年8月には、スポーツ庁より一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）に事業委託され「大学スポーツ資源を活用した地域振興モデル創出事業」とより具体的かつ明確な達成目標を掲げた事業となった。青山学院大学は前回、第2期スポーツ基本計画で唱えられた「スポーツ環境の基盤となる『人材』と『場』の充実」を支える施策として取り上げられた「大学スポーツの振興」に引き続き、事業計画が採択された。学院内ボトムアッププロジェクトである「オール青山スポーツコミュニティ」はそこでCAS事業（社会に必要とされる指導人財育成：現在は社会連携機構内の事業として継続）を形成する両輪のいっぽうである指導者養成事業の中心的な活動を担って約1年半に渡り企画運営を担った。2025年度からは大学方針による縮小化を受け社会連携機構と事務部署が担う事業にシフト変更された。

2024年度は移行期として前掲のスポーツ活動は、教育研究機関である大学として研究プ

プロジェクトと授業プログラムとしてアクティブラーニングのトライアルが実施された。他大学の地域連携スポーツ事業では体育大学あるいは体育学部を有する大学が学生たちの実践的学びの場として積極的な関りが多くみられる。本学の学生スポーツ活動を肯定的に捉え、地域連携スポーツ事業への特徴的かつ積極的な関り方を考慮する余地が多い現状である。「様々な学部での学び」は即ち、スポーツ活動を多角的にサポートする立場にある学生たちの学びに通じる可能性を有している。指導、運営、企画、資金調達に至るまで各学部での学びを有用に発揮するステージとしてスポーツ事業の現場は大いに教育的効果を発揮する題材となる。大学キャンパス内にて、講座での学びを実践できる環境は大変に貴重である。そこでフィードバックされた省察に基づき更に講座におけるグループ討議などを経て実践に向かう循環学習が形成される。研究プロジェクトにおいては「アントレプレナーシップ開発」を目的として、この大学総合型スポーツクラブを対象とした学生活動から成果を見出そうとしている。スポーツマネジメント・キャリアプログラムでは、学部での学びを実践に応用する機会が提供される。この積み重ねは事業の「視察」から、「指導・運営」など実践的な関りに繋がり、さらに「企画・提案」へと発展的な関りが求められる。これらの過程には事業の目的達成に向けた、多角的な視点や準備が求められ「チーム」でプロジェクトを動かし、それぞれの役割の中で互いに事業達成のためのリーダーシップ発揮が必須となる。このような活動により体験する試行錯誤は、自ら起業し事業を発展させる際にも必要となるであろう「アントレプレナーシップ」養成が大いに期待される。2025年度からは、『スポーツによる学びと実践を結びなおす』事業開発を目指す学院内ボトムアッププロジェクト「オール青山スポーツコミュニティ」と各研究プロジェクト、スポーツマネジメントキャリア関連授業、高校・大学連携授業との新たな協働プロジェクトが始動する。

3 JFA 被災地支援ウォーキングフットボール事業とボランティア活動

前掲の角田寛和氏と本学におけるスポーツと教育活動の歩みは2015年に遡る。著者は2013年から、5年間にわたり東北三県とドイツプロクラブの被災地支援、クラブとしての国際的社会貢献活動のサポートを実施した。その際に活動を共にして、角田氏の被災地支援活動の様子を知ることとなる。以降、毎年経営学部スポーツマネジメント関連講座におけるゲスト講師として来校頂き、学生たちの学びを深める取り組みにご協力頂いている。サッカー観戦、応援により繋がる絆が支援活動のチームを作る。同じ想い、地域の広がり多くの仲間との関りを生み「ひとを巻き込む」こと、「継続より断続」などボランティア活動の重要性と多くの人との関りがいかに重要かを講座にて解説頂いている。

著者は2017年にはユニバーシアード台北大会男子日本代表監督として大学生アスリートを率いて金メダルを獲得する機会に恵まれた。その際には、直前合宿を福島にて実施し、角

田氏に代表チーム合宿における被災地視察のコーディネートをお願いした。講師として選手たちを前に「当たり前ではない日常への感謝」、「被災地で逞しく再編されたマーチングバンドの子供たちの活動」などを講演頂いた。さらに合宿後半では、東京電力福島原子力発電所近隣の今を知るための講義、視察、現地小中学生のマーチングバンドとの交流などを企画、実施した。現在、選手たちは合宿を経て、ユニバーシアード代表で世界一を経験し、Jリーグや海外トップリーグで活躍するアスリートとなった。この合宿で体感した「サッカーの出来る日常」があたりまえではないこと、この日常とこれを支えてくれている多くの関係者が存在すること、感謝の気持ちを忘れないことは現在でも共有してくれていると確信する。これに関わったアスリートたちは「ユニバーシアード優勝」という短期的な目標を達成したことに留まらず、国内外のトップリーグで活躍し、日本を代表するサッカー選手となった今も常に「当たり前ではない日常への感謝」を持って、困難な機会に直面しても諦めず、挑戦を続ける生き方を継続しているはずである。この後も2022年から開始した学院内のスポーツ科目関連教職員有志と大学生によって組織されたボトムアッププロジェクトである「オール青山スポーツコミュニティ」において、角田氏には様々なサポートを頂いている。シニア世代の健康増進とコミュニティ作りを目的とした「オール青山ウォーキングフットボール体験」もその一つである。開催したウォーキングフットボール関連事業は4回を数える。体験企画には毎回幅広い年齢層の参加者が集い、互いに尊重しながら競技を楽しむことによりコミュニケーションの促進、達成感、高揚感を感じる体験も併せて獲得していることがアンケート調査やインタビューより観察された。また、角田氏の提案から企画内で実施した「被災地支援活動報告」や「被災地支援募金」は、小さなスポーツコミュニティが遠く離れた地で困難と直面するコミュニティの皆さんと繋がる契機を提供することになった。このようなスポーツ活動を通じた人と人を繋ぐ取り組みは、参加者の皆さんの心身のウェルビーイングを促進する活動となることが示唆された。

2024年1月に能登半島沖地震にて被災した地域を中心とした公益財団法人日本サッカー協会（以下JFA）の様々な支援活動の一環として、約半年で5回に及ぶウォーキングフットボール活動があげられる。なかでも日常のスポーツ環境が不足した中で、健康体力増進の契機として、地域コミュニティにおける交流の場として、心理的負担からの解放・レクリエーションの場として有用な時間となっている。各回で訪れる著名な元選手や指導者と共にスポーツを体験することは地域住民の希望や喜びに繋がるイベントと位置付けられる。角田氏は奥能登地域の復興支援にも被災直後から訪れている。民間ボランティア団体との協働により「泥だし」、「片付け」などの作業に意欲的に関わっている。自ら十数回に及ぶ支援活動を実施している角田氏は、JFA主催のウォーキングフットボール活動にも関わり、活動の意義を既報⁸⁾のオンラインインタビュー（2024年10月17日）にても聴取している。日常に

おけるスポーツ活動の場所が皆無なわけではない。その前提でチームスポーツであるウォーキングフットボールをあらゆる年齢層の地域住民と体験することによる「コミュニケーションの活性化」、それによる「高揚感や自己肯定感の獲得」はこの種目とルールならではの成果であろうと指摘している。身体的な健康増進、体力向上のみを考慮すれば、処方された施行を繰り返すことで目的を達成できるが、「人との関り」のなかで実施される活動時の「声掛け、得点時の高揚、他人からの賞賛、自己肯定感の獲得」などは被災地における失われた日常の中でコミュニティのウェルビーイングを促進する活動としての有用性が示唆される。

また、これに先立ち被災地の子供たちを 2024 年パリで開催された夏季五輪に招待するという企画をクラウドファンディングによる資金にて実施している。スポーツによる被災地復興支援の実践である。JFA 主催のイベントで全国のサッカー関係者にその功績を発信する機会となった報告会の告知を下記のサイト引用にて掲載する。

ちょんまげ隊長つんさんと能登の中学生による活動報告会@ blue-ing! のお知らせ

(2024 年 10 月 10 日)

10 月 15 日 (火) 11:30 より、JFA サッカー文化創造拠点「blue-ing!」にて、能登半島地震復興支援活動に尽力するサポーター、ちょんまげ隊長つんさんと能登の中学生たちによる活動報告会を開催いたします。この報告会は、先日発生した豪雨により再び被災した能登半島の現状を直接知ることができる貴重な機会です。

ちょんまげ隊長つんさんと能登の中学生たちは、今夏のパリでの応援を通じて、被災地への希望を送り続けてきました。帰国後、復興への歩みが進もうとしていた矢先の、甚大な豪雨水害。報告会では、彼らがどのような想いで活動してきたのか、その具体的なエピソードを聞かせてもらいます。また、JFA 能登半島地震復興支援プロジェクトの取り組みについてもご報告します。

登壇：ちょんまげ隊長つんさん、パリ五輪視察に参加した能登の中学生 (5 名)

今回の被災地復興支援活動は、角田氏の提案と企画が大学生の運営と実践により実現した。このような学びの機会を提案頂き、実現までに多くの尽力を頂いた角田氏には、重ねて感謝の意を表する。また、内閣府のボランティア活動援助金の申請にあたり角田氏に発案頂いたことも併せて報告する。

4 大学生アスリートと教職員による「スポーツ被災地復興支援活動」の実践

1) 活動に向けた現地視察

2024年10月26日から27日には、事前準備として著者と角田氏により、石川県輪島市、珠洲市、能登町へ現地視察を実施した。奥能登地域は復興が進まず、まだまだ日常が取り戻せないといわれる現状を目の当たりにした。2023年5月、2024年1月の地震被害、同年夏の豪雨災害と容赦ない自然災害が地域を襲った。前掲の角田氏主催による被災地中学生のバリ五輪招待に参加した5名の中学生のうち3名と面会し、各地域を案内しながら現状を聴取する機会を得た。また、輪島市の少年サッカークラブのスタッフの皆さんとの懇談会ではスポーツ活動のままならない現状を聞くことができた。輪島市役所復興支援担当者にお会いする機会を頂き、能登町では被災し移築を余儀なくされながらも、能登町の創生のために社団法人を運営する主催者のご子息のサッカー少年にスポーツ施設の現状と子供たちの生活の様子を伺った。市外への移住者が増加する珠洲市に住む中学生からは、地震と豪雨で変わり果てた現在の様子を、本人の実感を込めて伺うこととなった。視察の最後には能登町を中心に復興支援をコーディネートする市民ボランティア団体リーダーの青年からも現状を聞き取った。同じタイミングで関西から支援活動に訪れた大学生と一緒にになった。当該グループの皆さんはバリ五輪招待を受けた女子中学生を招き、現地の状況を懇談する機会を設定していた。それぞれの感じ方と復興への想いを胸にしている様子であった。このような視察機会を通して、微力ながら自らと学生たちによる活動がこの地で暮らす皆さんの役に立てることを祈念するばかりであった。オール青山スポーツコミュニティのオフィシャルサイトでは、この視察の報告と共に「春には是非とも青学のスポーツのちからを能登の皆さんに届けて笑顔いっぱいにしましょう！」というメッセージを掲載し活動への参加を呼び掛けた。



資料 被災地支援活動と事前視察

被災家屋片付けと傾聴ボランティア・珠洲市小学校前・能登町の公園にて

2) 活動実施に向けたマネジメントチーム作り

視察後には、角田氏の現地自治体や協力者との調整を担当頂き、学生によるボランティアスタッフのチーム作りを開始した。運営に関わる学生スタッフは通常事業を運営、指導する学生スタッフから希望者を募り、参加アスリートに関しては2025年1月に開催される「キッ

ズスポーツチャレンジ（社会連携機構主催）」の状況を鑑みてチーム編成が進められた。各種目を厳選し最終的には7種目から各種目2名以内のスタッフに依頼することとなった。開催1カ月前からは角田氏の主催するオンラインミーティングにより、学生運営スタッフが中心となり準備と情報共有を実施した。さらにチラシを作成し現地自治体へ送付し配布するという方式とSNSによる関係団体への情報共有に等により参加者を募ることとなった。事前準備を含めて学生の学びの場であるアクティブラーニング教材としても、意義深いプログラムを提供することとなった。

3) スポーツによる復興支援活動「キッズスポーツチャレンジ」と学び

2025年3月7日（金）から9日（日）の3日間にわたり、青学アスリート能登被災地復興支援活動「キッズスポーツチャレンジ in 能登」を実施した。この取り組みは内閣府ボランティア補助金、青山学院大学グローバルビジネス研究所アクティブラーニング開発プロジェクトおよび経営学部研究補助金の支援を受け、学院内の教員と学生により組織されたボトムアッププロジェクト「オール青山スポーツコミュニティ」が主催した。オール青山スポーツコミュニティではお馴染みの「キッズスポーツチャレンジ」によるスポーツ体験を奥能登地域全3会場にて開催した。初日は2セッションを輪島市河井小学校にて実施した。第1セッションは授業の一環として4年生を対象として約70名が参加した。全7種目を70分間で4回チャレンジした。その後、放課プログラムとして全学年対象で実施した際には90名を超える小学生と教職員が参加した。当日は石川県サッカー協会北野会長が激励に訪れてくれた。翌日午前中は、珠洲市健民体育館にて小中学生と保護者、地域の皆さんで70名を超える参加者を集めた。午後は能登町の能都中学校第二体育館にて、学年の幅が広がり小中高校生と地域の皆さん80名がチャレンジに参加した。何よりも学生アスリートとスタッフが、参加者の皆さんからたくさんのパワーを受けることとなった。

※以下写真提供 福村香奈絵さん（フォトグラファー）



資料 珠洲市会場集合写真・競技ダンスチャレンジ・ボクシングチャレンジ

輪島会場ではツエーゲン金沢のアンバサダーを務める『大学サッカー世界一獲得』（2005年ユニバーシアード競技会イヅミル大会金メダル）のレジェンド廣井友信さん（駒澤大学出

身)、辻尾真二さん(中央大学出身)がサポートに駆けつけた。競技ダンスでは全日本3位、英国の国際大会でのチャンピオンを目指す社交ダンスの石垣和宏さん(経営学部4年)、荻谷芽唯さん(早稲田大学教育学部2年)ペアは、切れ味抜群でフロア狭しと美しく力強い舞いを披露してくれた。体育会ボクシング部からは昨年末、ワールドボクシングカップ・ファイナル・シェフィールド2024女子50kg級で見事優勝を果たした、ボクシング部の篠原光さん(教育人間科学部4年)と篠原一三コーチの名コンビで子供たちにボクシングの魅力を伝えた。



資料 女子バレーボール部のチャレンジ・男子ラクロス部のチャレンジ

2024年度、全日本インカレ準優勝を誇る女子バレーボール部からは主将の谷島花虹さん(経営学部4年)、セッターの鉾久香凜さん(法学部4年)が代表参加した。この会場を訪れることの出来なかった部員の想いは、皆で手作りした参加賞記念メダルに込めて参加者全員に授与した。

男女ラクロス部150名を代表して参戦したのは武田直起さん(経営学部3年)と林壺成さん(英米文学科1年)。合計4回に及ぶセッションでは回を追うごとに指導のレベルアップが目を見張った。



資料 少林寺拳法部・フットサル・卓球部・進行役の「ツンさん」こと角田氏

体育会少林寺拳法部からは組み手の迫力満点のふたり、常廣珠実(コミュニティ人間科学部3年)さんと山田紗弥乃(経営3年)さんが参戦してくれた。冬場の体育館の床は尋常ではない冷たさだったが元気に素足でパフォーマンスしてくれた。圧巻の演舞に参加者が集まった。

フットサルは元なでしこリーガーで毎週火曜日開催の「なでしこひろばin 青山学院」リーダーの仙石来夢さんの指導に子供たちが熱狂した。東京ヴェルディフットサルクラブでゴールキーパーとして活躍中の山後優人さん(英米部学科2年)も身体を張ってゴールを守る熱いプ

レーを披露してくれた。

体育会卓球部からは諸田陸人さん（法学部2年）がスゴ技を披露してくれた。「上手になりたい！」という強い思いの子供たちに対して、丁寧に優しく指導した。その笑顔に参加者の皆さん魅了された。

現地チャレンジではレギュラー出演の「ちょんまげ隊のツンさん」として進行役を務めた角田氏。この企画のまさに心臓であった。

そして、オール青山 SC 学生スタッフ『花の2年生トリオ』として羽鳥健斗さん（経営学部2年）、千葉大洋さん（英米文学科2年）、高橋慶さん（経済学部2年）は裏方として運営に専念してくれた。

4) 避難所訪問「炊き出し」と被災地視察

被災から1年が経過するなか復興がままならない様子を目の当たりにして学生、スタッフ共々この地で何か我々が役に立つことはないかと想いを巡らせた3日間であった。早朝に羽田空港を出発したチーム青学アスリートは雪の「のと里山空港」に到着した。マイクロバスにて輪島市に向け移動開始。角田氏は前日入りして迎えてくれた。

到着後にまず向かったのは、かつて輪島の朝市に出店していた皆さんが仮店舗を構える商業施設を訪問した。その目的は地産地消への協力も被災地支援委繋がるということを理解することにある。宿舎で使う漆器の器とお箸を購入するスタッフがいた。美味しい現地のパン屋さんは大人気であった。競技ダンスの石垣さんは現地への支援金が購入価格に含まれる【NOTO NOT ALONE】Tシャツを購入して地元への貢献を実践した。さっそく参加者は思い、思いの支援の形を考え始めた。



資料 能登里山空港到着バス移動・輪島市朝市跡地視察・宿泊施設にて近隣の皆さんと夕食準備

歴史ある輪島の朝市。現在は地盤整備中である。市内で被災された、現地在住の女性と事前視察でもお世話になった少年サッカークラブ輪島ジュニアのスタッフが案内を担当してくれた。地震、津波、豪雨により被災された自宅を視察させて頂いた。なかなか復興は進まない。伝える支援も重要であると学生たちに伝えてくれた。奥能登初のキッズスポーツチャレンジは輪島市河井小学校体育館にて実施。到着後、慌ただしくセッションの準備をしている

と、元気な子供たちの声がする。準備もままならないままにチャレンジが開始された。完全な準備は重要であるが、それ以上にいかなる状況にも対応できる柔軟な発想と行動は被災地における重要な活動姿勢であると再度認識した。不測の事態は日常茶飯事である。JFCA のふじさん、富山FA のピエールさんを迎え賑やかにイベントが開始された。終了時には子供たちにこの場に立ち会えなかった青学アスリートが心を込めて作ったメダルと青学ファイル、そして高等部の小島先生、今井先生の力作認定証を送り届けることが出来た。

終了後、能登町の宿舎「藤波館」（日本リザルツ運営）にお世話になる。宿舎に戻り、追加のメダル作成、夕食を近所のお母様たちと作るスタッフたちと役割分担して作業を進める。夕食メニューは、最終日の炊き出しで提供する「とりなべ」と「パンケーキ」、そして大釜の白飯となった。各自持参の食器を使って環境に優しく夕食を開始した。

3月8日土曜日、起床後に朝食。同じような食事風景があった。その通り、昨晚の「とりなべ」と白飯を起床したスタッフから順番で食する。珠洲市に向けてマイクロバスにて出発。途中、津波被害があった市内にてサポート高校生が自身の被災経験を語ってくれた。さらに民間ボランティア団体 OPEN JAPAN リーダーのりきくんが災害時の心得を共有してくれた。これも伝える支援の実践編である。午前中は珠洲市健民体育館にてチャレンジを実施。今井先生の出身地であり、職員さんは同期、同期のお友達のお母さん、高校時代の恩師も激励に訪れてくれた。このような出逢いを目の当たりにすることも学生達には素晴らしい経験となろう。輪島市在住の女子中学生2名もサポート役で合流してくれた。実は事前視察の際にも対面したバリ五輪招待参加の5名のうちの一人でもある。大学生と過ごす2日間で様々な想いを共有して欲しい。午後には3回目となる現地チャレンジであった。学生アスリートも指導に、師範に絶好調である。自分の競技以外にもチャレンジする余裕も生まれるアスリートたちであった。前日の活動の様子は地元、北國新聞に掲載された。



資料 それぞれの被災地支援を考え始める・他種目にも参戦・地元新聞に掲載された活動紹介

2日目を終えて帰京するスタッフを含めて最初で最後のスタッフ全員集合の写真を珠洲市にて撮影する。午後は能登町の能都中学校第二体育館にて最後のチャレンジ。疲れは否めないが、全ての種目で今回最高のパフォーマンスを披露してくれた。アスリートの底力が発揮される瞬間でもあった。藤波館に戻り、今回の奥能登で最後の晚餐を迎える。今回、お子さんと一緒にチャレンジに参加、能登町との事前交渉、準備をお願いした「みらいのとしび」の木村さんから学生たちの取り組みにコメント頂いた。「大学生年代の少ないこの地域で、スポーツを通して子供たちが若者と触れ合えることは大きなメリットがある」と評価を頂き、「継続的な活動を望む」との希望を頂いた。その他、武蔵大学学生で既に15回も支援に訪れている学生から活動の様子を報告頂いた。ボランティアサポートしてくれた現地高校生、女子中学生の皆さんからも暖かい感謝のコメントを頂いた。さらに藤波館をこの春から運営する日本リザルツの赤沼さんからも、同年代である学生たちに対して活動に対する感謝のコメントを頂いた。

最終日3日目の朝を迎えた。年長スタッフグループは炊き出し時の学生、スタッフのお昼ごはんとして昨晚の白飯でおにぎりを39個準備した。各会場と自治体へのお礼の寄せ書きも完成にむけ準備している。各自の荷物、グループの荷物、炊き出しの具材と調理器具をバスとバンに積み込み藤波館を後にする。途中、りきくん所属のOPEN JAPAN ボランティアベースを表敬訪問した。青学OGの方が責任者を務めていることもありご苦労されている活動のお話を伺う。お仕事の傍ら、写真の洗浄作業を都内で実施されているとのこと。様々な支援があることを知る。

その後、沿岸を通り被災状況と復興状況を視察した。巨大イカのモニュメントでは学生たちは修学旅行の小学生よろしく大はしゃぎであった。このモニュメントも復興の大きな助けとなったことを知り様々な取り組みが復興に繋がることを改めて思う。移動後の車窓からまだまだ復旧が間に合わない穴水地区の現状を垣間見る。



資料 避難所にて傾聴ボランティア・炊き出し準備・パンケーキ作り

炊き出し提供と交流の会場である輪島市大屋小学校避難所に到着する。各自の持ち場にて役割を開始する。近隣にお住まいのお母様、マイクロバスの運転でお世話になっている先輩、輪島ジュニアの池さんからもアドバイス頂きながら「とりなべ」と白飯、アップルパンケーキ

キを提供することが出来た。料理が出来るまでの間には、マッサージしたり、お話を伺い傾聴ボランティアを実践するなど避難所で生活する皆さんの日常を共有した。避難所を後にする際も、バスが見えなくなるまで、手を振り続けてくれた皆さんであった。学生たちの取り組みの素晴らしさを実感した瞬間でもあった。いよいよ、現地でサポートしてくれた皆さんともお別れの時を迎えた。学生たちとは感極まる時間となった。短い活動ではあったが絆は強かったことを再確認した。スポーツを通した多くの出逢いと絆を繋ぐ活動に感謝したい。更なるステップを踏み出すためには「継続」が重要である。この想いを継続することが肝要となろう。

5 まとめ

2022年より、青山学院大学にて地域貢献・社会連携活動の一環として、スポーツ庁補助金、AOYAMA VISION等の補助金を受け、約2年半にわたり学院内の教員と学生で構成されるボトムアッププロジェクト「オール青山スポーツコミュニティ」が実質的な運営、実践を担ってきた「オール青山キッズスポーツチャレンジ」(2025年からは「キッズスポーツチャレンジ」と名称変更し大学社会連携機構による公式事業となった)を、奥能登被災地の3市町村にて実施した。小中学生を対象とした様々なスポーツ種目へのチャレンジが出来るプログラムである。運営や指導は全て青山学院大学の学生が担うこととなった。地域の子供たちに限らず保護者や高齢者も参加推奨し、近隣には希少な現役の大学アスリートとの触れ合いは貴重な機会となった。さらに指導にあたる大学アスリートには報告の通り「大いなる実戦での学びの場」となった。今後も「スポーツによる社会課題への取り組み」は、実践的教材として、更にはキャリアマネジメント教育開発の研究対象として有用な役割を果たすことが期待される。

謝辞

本研究及び研究対象となった被災地支援活動は、経営学会研究補助金、青山学院大学グローバルビジネス研究所特別研究プロジェクト予算および内閣府ボランティア活動支援補助金により実施されたことを報告し、ここに謝意を表する。

※1 2022年度より、学院内体育関連科目教員有志(中等部、高等部、大学)により発足し「学院内をスポーツでつなぐ・地域と学院のスポーツによる連携」を目的に学院内施設で、専門指導者と生徒・学生の運営により活動し、「研究と学びの場」を提供するボトムアッププロジェクトである。同様の主旨にて2024年にはプロジェクトメンバーが主体となり、より広範な活動を目的として一般社団法人オール青山スポーツコミュニティが発足した。

参考文献

- 1) 阿部利江. 災害ボランティア活動を通して福祉や防災を学ぶ: 東日本大震災における避難所で

- の支援活動より. 東北福祉大学研究紀要, 2021, 45: 179-201.
- 2) 江田英里佳; 巻誠一郎ほか. 災害とスポーツ: 大規模災害時におけるスポーツの意義を考える. 身体文化論 28: 身体運動文化学会第 27 回大会シンポジウム, 2023, 28. 79-92.
 - 3) 波多腰克晃. 体育・スポーツ系学部はどんな社会課題に向き合っているのか. 体育の科学, 2025, 75.3: 187-193.
 - 4) INOUE, Yuhei; HAVARD, Cody T. Sport and disaster relief: A content analysis. Disaster Prevention and Management, 2015, 24.3: 355-368.
 - 5) 小林勉. ソーシャル・キャピタル論から見た地域スポーツの動向. 現代スポーツ評論, 2024, 51: 36-50.
 - 6) 宮崎純一. スポーツアントレプレナーシップ開発プログラムに向けた実践: スポーツキャリア関連講座の事例考察. 青山経営論集, 2024, 59.4: 3-17.
 - 7) 宮崎純一. J リーグの社会連携活動と SDGs: 「シャレン!」による取り組みの事例報告. 青山経営論集, 2024, 59.3: 1-20.
 - 8) 宮崎純一. ウェルビーイング・コミュニティ創出におけるスポーツ活動: ウォーキングフットボールを活用した被災地支援の事例より. 青山経営論集, 2024, 59. 別冊:-.
 - 9) 宮崎純一. スポーツマネジメントキャリアプログラム実践のプラットフォーム構築: 大学総合型地域スポーツクラブの事例報告. 青山経営論集, 2024, 59.2: 1-32.
 - 10) 宮崎純一. スポーツマネジメント・キャリアプログラムへの展開: 大学総合型地域スポーツクラブの事例. 青山経営論集, 2024, 59.1: 33-61.
 - 11) 宮崎純一. 大学総合型地域スポーツクラブのマネジメント: 社会課題解決に果たすスポーツの役割. 青山経営論集, 2023, 58.2: 1, 3-34.
 - 12) 宮崎純一. スポーツコミュニティ創出とソーシャル・キャピタル: スポーツ庁「感動する大学スポーツ支援事業」の事例より. 青山経営論集, 2022, 57. 別冊: 25-43.
 - 13) McDonald-Harker, C., Drolet, J. L., & Colvin, S. The Role of Sport in Building Resilience among Children. The International Journal of Sport and Society, 2021, 12.1: 33.
 - 14) 小木曾湧; 舟橋弘晃; 間野義之. エリートアスリートによる社会貢献活動の類型化: 新聞記事の内容分析. スポーツ産業学研究, 2021, 31.1: 1_83-1_91.
 - 15) 吉田毅. 東日本大震災で被災したスポーツ少年の復興プロセス—復興をおし進めた力とは—. 身体運動文化研究, 2023, physicalarts. 2024.001.

- ・スポーツ庁, 第 3 期スポーツ基本計画, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcate_top01/list/1372413_00001.htm
- ・公益財団法人日本サッカー協会公式サイト https://www.jfa.jp/social_action_programme/
- ・一般社団法人オール青山スポーツコミュニティ公式サイト <https://all-aoyama-sports-community.com/news/>

フィードバック資料 (参加スタッフ 12 名から回収)

1 現地開催に向けた準備について (事前ミーティング、視察、器具用具など)

- ・事前ミーティングは、毎回参加できたわけではありませんでしたが、少人数で、一人ひとりの意見が反映されていく雰囲気が良かったと思います。
- ・開催前 1 カ月のみの準備期間しかなく、大分追い込まれた中での準備になってしまった。
- ・学生も含めて事前にミーティングを行っていたので、スムーズに物事が進みました。
- ・被災地の現況を映像で見せていただいて、気持ちが引き締まる思いだった。
- ・現地での自分たちの宿や食事を自分たちで準備するという、ごく当たり前のことが大変だった。
- ・オンラインでミーティングを開催してくださり助かりました。

- ・ 中部体育科でソフトクロスを貸し出しましたが、クロスケースなどを用意してあげるべきだったと反省しています。
- ・ 女子バレー部の部員にメダル作成のお願い、相手の谷島とのミーティング
- ・ かなり準備期間が短く大変なこともあったと思いますが、そんな中で色々準備してくださった学生スタッフや先生方にはとても感謝しています。
- ・ 一方で参加が決まる前にもう少しどういった内容で、どのような事をアスリートにしてもらいたいか、それを聞いた上できちんと被災地支援をしたいという気持ちがあるのかどうかという確認はあった方が良かったのかなと感じました。
- ・ もちろん被災地支援なので、普段やっているキッズスポーツとは意味合いが違うというのは分かると思いますが、実際に募金活動であったり、特賞、メダル作製の案が出た際に、そのために時間や労力を割く時間や気持ちがあるかどうかという点においては zoom 会議の様子を見ていると気持ちがバラバラであると感じました。特にトップクラスのアスリートにおいては、ちょっとした時間やスケジュール変更が競技に影響を与えることもあると思いますので、そういった細かい確認は必要かなと思います。
- ・ ある程度の時間や労力の負担を覚悟の上、それでも来てくれるアスリートだけを集めるのか、周りの運営がなるべくアスリートの負担を減らすようにして、幅広いアスリートに来てもらうのかなど方向性を決めることも大事なかなと思いました。
- ・ 今回は初めての開催だったのでどういった内容になるかは不透明なところもあったと思いますが、このイベントの参加によって、キッズスポーツチャレンジの実施以外にどのような事をしないとイケないのか、またそれをやる気持ちや時間的余裕がしっかりあるかどうかは事前に確認する必要がありますと思いました。
- ・ 全部、やっていたいたとこに同行させていただき、本当に感謝しております。
- ・ 役割を聞いたのが、1カ月前前だったので、もう少し行動できていたら、募金活動などより良い準備を行うことができたと思う。
- ・ 限られた情報と時間の中で、アスリートの方々へ全体ミーティングを行うことは非常に難しかった。事前ミーティング以前の段階で情報の共有が気になった。情報共有（掲示板形式が良い）をあらかじめデジタルで設置しておくべきと感じた。特に今回の場合は各体育会の要望を現地とつなげる必要があるためそこを各個人のやりとりをオープンにすべきと感じた。
- ・ 一部のスタッフに負担が多くかった。全体にもっと詳細を伝えていた方が良かったと思う。

2 現地への移動、現地での移動、宿泊、食事などについて

- ・ 宿泊、食事は現地らしさを感じることができました。
- ・ 現地での移動は、道路がへこんでいたり電柱が曲がっていたりして、車で走っているだけで酔うほどだった。
- ・ 大人数での食事はご飯と汁物だけでありがたかったが、地元の方にご馳走になった現地の食材は新鮮でおいしかった。
- ・ 現地の方々が、移動からご飯から宿泊施設から、快くサポートしてくださり、あたたかい気持ちになりました。
- ・ 交通機関の回復が進まぬ中、手配をしていただきありがとうございました。
- ・ 現地の方が作ってくださった烏野菜みそ鍋や、ご馳走が非常に美味しかったです。
- ・ 長い移動、道が悪いにも関わらず、バスを出して頂き本当に感謝しております。
- ・ 被災地で大変な中、車の手配、宿も用意していただけて、とてもありがたかったです。
- ・ 車で行ったので動きやすかったです。宿泊、食事ともみなさんと協力して一緒に本当に多くの学びをえました！感謝
- ・ ボランティアスタッフの方々や手配を行ってくださったスタッフのおかげで快適に過ごすことが

できた。

- ・移動に関して言えば一番印象深かったのは能登から金沢に向かう帰りの高速バス。2日目帰宅組しか見えていないと思うが、能登からかなり離れていても道路状況はいまだに改善されておらず、被災地の中心を見た後に、逆にこんなにも広範囲に被害が広がっているのかと被害の広さを感じた。また地図上でみるよりも能登と金沢の距離があり、復興が遅れてしまう難しさの一因となっていることも理解できた。また幹線道路含め能登へのルートが震災以前に少なく、過疎地域での生活の難しさも感じた。
- ・スタッフ作成のタイムテーブルにそってみんなが素早く動いていてとてもありがたかった。

3 宿舎での交流会や地元の皆さんとの情報共有。宿舎でのスタッフ間でのコミュニケーションなど。

- ・青学生のトップアスリートの方に会う機会はほとんどなかったため、とてもいい機会でした。
- ・各自が自分の競技に誇りを持って向き合っている姿が非常に印象的で、楽しかったです。
- ・熱い思いでスポーツに取り組んでいる姿、多くの時間を割いて準備してくださったスタッフの皆様が、同じ大学で学んでいるということに誇りを持ちました。
- ・被災地支援として働かれている方々に会い、人との繋がりの大切さを再認識しました。
- ・このような支援をライフワークにされている方がいるという点も非常に良い学びでした。人は「助け、助けられることに幸せを感じる」とおっしゃっていた方が印象的でした。
- ・今回の企画をしていなければ絶対に出会えなかった人と出会えたということが1番印象的だった。
- ・学生だけでなく、大人同士でのコミュニケーションが活発にありました。そのため、自分の経験を参加者に共有したり、逆に参加者の経験を共有することができ、非常に良い経験になりました。
- ・被災された方々の雰囲気は思いのほか明るく、厳しい状況を乗り越えていこうとする強い覚悟を感じた。
- ・支援活動に行ったこちらが元気をもらったほどだった。
- ・参加者同士はよく交流できていたが、できれば、現地の同世代の方々ともう少し接したかった。
- ・こんなにも私自身にできること、喜んでもらえることがあるということに驚きました。
- ・一つ屋根の下・同じ釜の飯を食う・様々な背景の方々と深く交流できたこと、只々感謝しております。
- ・他のアスリートの方々、スタッフ含め非常に気さくに交流をしてくれたので、日常の話から、その日スポーツチャレンジで工夫した点など、有意義な話をすることができました。
- ・スタッフ間でのコミュニケーションはとても自分にとっては魅力的でした。
- ・他のスポーツをやっている方やそれに携わっている方とお話する機会は無いので、色々なジャンルのお話を聞け、コミュニティも広がったのはとてもよかったです。
- ・地元の方や、他のボランティアのみなさんとの、ミーティングでのコミュニケーションによって、66歳の自分も含めてそれぞれが学び気づき人としての成長は大きかったです。
- ・多くの方とコミュニケーションを取ることができ、様々な考えを学ぶことができてよかった。
- ・限られた時間で難しいが、ひとり一人がもっと自由に話せる場があれば、より良いと考えた。
- ・食事、とてもおいしかったです。地域のお母さまや食材を提供してくださった方々にあらためて御礼申し上げます。
- ・宿泊地もまわりに何もなかったですが（笑）、逆にそれが人と人の繋がりを強調してくれて人の暖かみを感じました。
- ・食事をみんなで作って配膳して机を囲んでともに食事をするということのコミュニケーションとしての効果を改めて感じた。同じ釜の飯を食べた仲間、という表現が決して誇大評価ではないなと二日目以降の各自のコミュニケーションの円滑具合などから感じ取れた。
- ・今回で仲良くなった学生の方が多くこれからもいい関係を築いて行けたらと思います。

4 各会場での活動について ①輪島市河井小学校会場 ②珠洲市健民体育館会場

(輪島市会場)

- ・参加してくれた小学生の子がとても楽しそうでエネルギー溢れる姿が印象的でした。
- ・放課後教室で参加してくれた方は、1～2年生が多く、競技をどう体験してもらうかもう少し工夫する必要があったと思います。
- ・ボランティアの方々のサポートがとてもありがたかったです。
- ・小学校の子どもたちが喧嘩なく楽しんでくれたこと嬉しかった。
- ・子ども達だけでなく、若い方々が地域を訪れることに大きな意味を感じました。人が集うことで喜びを生み出すことを改めて感じました。
- ・アップを担当させて頂いたのですが、大人数の子供を動かすのは非常に難しいなと感じました。
- ・いつものキッズスポーツチャレンジと参加者の年代が似ていてとてもやりやすかったです。男の子も数名参加してくれて、一番社交ダンスに対して抵抗がない世代だなと感じました。
- ・帰り際に参加者の保護者から、子供がすごくダンスが楽しかったって言っていますと言われた時はとても嬉しかったです。
- ・学生たちの笑顔と一緒に楽しみながらの姿勢に、スポーツの原点や価値を感じました！
- ・小学生が元気にスポーツを行う姿をみて、こちらが元気を頂いた。
- ・各移動と昼食などの時間がかなりカツカツなのは仕方ないとはいえ改善できる余地があるのではないか
- ・昼食を出前の弁当にするのは被災地支援が当初の目的であったが結果的に食事の時間の柔軟性を増した。
- ・事前に大きさの把握（会場の配置イメージ）などができたら準備時間の削減に繋がるのでは、と考える。
- ・時間を削れるところは削る、これを徹底することで各チャレンジの時間を増やすことができる、と次回開催時には常に念頭に置いて行動したい。
- ・卓球部からもう1人連れて来たら良かったと思いました。

(珠洲市会場)

- ・小学校に比べると年齢層が上がり、大人の方も参加してくださり、面白かったです。
- ・近くの中生がお手伝いに来てくれて、その中でみんなで楽しめたのが印象的でした。
- ・被災地の子どもたちの現状を肌で感じる事ができた。
- ・学生スタッフ、リキさん他、アスリートを支える皆様の献身に心打たれる思いでした。「サーバントリーダー」を育む青山学院の目指す教育がここにあると思います。
- ・小学生だけでなく、中学生もいたので内容に少し苦戦しました。
- ・セッションに来てくれた参加者のレベルに合わせて、メニューを変更でき良かったと感じています。
- ・中学生にもなると男女で手を繋いで踊る社交ダンスや、ダンス自体などにも少し恥ずかしさや抵抗感があるなと感じました。
- ・それぞれの種目の楽しさが現地の皆様にしっかり伝わり、心を温めることができていました。
- ・来て頂いた方々の笑顔で私がとても幸せを感じる事が出来た。
- ・改善点として、より多くの方々に体験してもらえるように周知の方法を事前に決めることである。

(能登町会場)

- ・自分自身が他の競技に挑戦することもでき、非常に貴重な機会でした。
- ・事務作業で手一杯であり参加できませんでした。
- ・被災地の子どもたちの現状を肌で感じる事ができた。
- ・様々な場所でのセッションをもとに、デモンストレーションの内容を工夫し、1番子供に興味を持ってもらえるようなデモンストレーションができたと思います。

- ・男の子がノリノリでスカートを履きに来てくれた姿がとても印象的でした。中々社交ダンスは恥ずかしいと思うが、スカートを履く事で笑い合い、参加のハードルが下がるというのは、一つ大きなアイデアだなと感じた。物珍しさや変なイメージを与える事は避けたいので、そこは慎重に考えないといけない。ただ、スカートは女子を誘うための方法だけではないというのは大きな発見でした。
- ・自分もボクシングやダンスを体験させて頂き、本気で楽しめました。

5 被災地区の視察、現地の方々からのお話など

- ・強いてあげるのであれば、被災地区をゆっくりとお話を聞きながら歩いて、現地を視察したかったです。
- ・現地の方から「元の状況が思い出せない」という話を伺えて、初めて被災を多少自分ごと化できたと感じました。
- ・被災の経験は経験した人にしかわからない。実際に目で見て話を聞いて考えることが大切だと改めて感じた。
- ・仮設住宅の現状を見ることができたこと、そこで生活する方々のお話を聞くことは、被災地支援に対する考え方を変えるきっかけになると感じた。
- ・想像していた以上に復興支援が進んでいない場所が多く、言葉が出ませんでした。それにもかかわらず、乗り越え明るく私たちに関わってくださる地域の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・被災地の現状をしっかりと自分の目や耳で知ることができたことが、非常に良い経験だったと思います。この現状を知った中で自分ができる行動に目を向けていきたいと思います。
- ・それぞれ重みがあり、説得力ある、心揺さぶるお話の数々が、これからの生き方の糧になりました。
- ・被災のお話を拝聴できたことで、被災することをより自分事として捉えることができた。
- ・実際に生の声を聴けたこと、そして何より個人的に感じたのは被災された方の自宅を案内していただけたこと。ここのキッチンが～、玄関がこうなっていて～、リアルに被災の状況を知ることができた。
- ・グラウンドの上に仮設住宅が設置されている現状を見て、同じフットボールを愛する仲間としてプレーする環境がないということの辛さを感じた。
- ・初めて被災地に行ったため状況を見るだけで普段の自分が当たり前になっていることがそうではないんだと感じた。

6 避難所訪問 炊き出し 交流

- ・現地の方のお話を聞くことができ体育館で暮らす現状を知ることができ、とてもいい経験でした。
- ・体育館での生活が一年以上も続くとは想像すら難しく、本当にご苦労だったと思う。
- ・帰京してから、「能登避難所が解除されて、全ての方が仮設住宅に引っ越された」というニュースをテレビで見て、ひとまずほっとした。
- ・地域の方々が教えてくださったメニューを作ることができて嬉しかった。
- ・避難所で生活をされる方々と炊き出したご飯を食べ、いろんなお話をすることができました。
- ・元気に過ごされていて、辛いことがあっても前を向く姿勢に、私も見習いたいと思いました。
- ・避難所生活している事実を知り、被災地への復興の遅さ大変さを感じました。
- ・避難所の皆さまと肩もみしながらのお話や一緒に食事しながらのお話で笑顔になりながら交流でき、困難に立ち向かう人の素晴らしさ強さを感じました。
- ・実際の避難所での生活を見させていただいたことで今も被災が継続していることを身に沁みて実感した。
- ・被災は発生時のみならず、その後にも行われていることを学んだ。
- ・もっと多くの人と関われるようにできれば良かったと思いました。

7 活動全般で感じたこと。改善すること、継続したいこと等。何でも…

- ・とにかくスタッフの皆さんに感謝しています。
- ・今回の活動を通して、多くのことを経験できました。まずは準備段階でのこと。中々時間的余裕がない中でなんとか間に合った部分があったので、やっぱり何事も準備で100%の状態に持っていければいいかなと思いました。
- ・自分は1泊2日の参加でしたが、初日に対面で初めて参加していただいた部活動関係者や教職員、スタッフの方々と短い時間の中で交流することができました。また、能登に訪問してからは現地の方や子どもたちの温かさに触れることができました。自分としては何か田舎特有の自分の地元のような感覚もありましたし、災害を経験して自分たちの想いで復興していくという人としての強さを感じました。
- ・様々なバックグラウンドを持つ人とコミュニケーションを取ることは非常に大切だと感じています。
- ・是非続けてほしいと思います。
- ・たくさんの支援団体が活動されていることを知り心強かった。
- ・本来は国が復興に関する費用を拠出して、なるべく早く元に戻す計画を立てた方がいいと思うが、それができないのであれば、現在も継続されている支援活動を実際に現地に行った我々が語り継ぎ、募金や必要な支援をいつでも送れる具体的なルートを作る必要があると思う。
- ・初めての被災地ボランティアをさせていただきましたが、これを主として活動されている方がいることとても勉強になりました。ボランティア側の私達の方が勉強になることや地域の方々の温かさ含め力をいただいたような気がします。
- ・このご縁を大切に、今できることを考え継続していきたいです。
- ・この先、角田さんの担当されている司会や進行について学生スタッフの皆様が学び、学生スタッフの皆様が主となって担当されるようになれば、より参加者の子どもたちとの距離が近くなるのかな…なんて事も思いました。
- ・4月から社会人となり、その仕事内容が保険を売る側として働きます。能登での経験があったからこそ、保険の知識をきちんと身につけ、地震などの災害によって起こる被害に対して自分にできる貢献を探して行動していきたいです。今回このような機会をいただき、本当にありがとうございました。
- ・今回の参加により、自分自身の可能性をととても感じました。社交ダンスというのは競技人口が少なくマイナースポーツではあるけど、それ故に珍しく、みんなが興味を持ってくれる。そして、ダンスを披露し、体験することで、子供達や被災地の方々に喜んでもらえる。今回のような被災地支援に参加しないと分からないことでとても良い経験でした。またぜひこのような機会があれば、参加したいと思います。
- ・体育館がものすごく寒く、僕らも含め、少林寺拳法などユニホームが決まっているスポーツ（ダンスなど）はとても寒い思いをしたので、開催時期については要検討かなと思います。
- ・本当に帯同させていただき感謝です！今後とも、自分のできることをしっかりと重ねて行きたいと思います。
- ・オール青山スポーツコミュニティの素晴らしさ、大切さを生で体験し、このような組織が全国に広がっていくことを願っています。ありがとうございました。
- ・計画的な運営が出来なければ、手伝っていただく方々に不安を感じさせてしまうことがあると感じた。手伝ってくれる方々に不安を感じさせてしまうと、せっかくのより良い活動で現地の方々や子ども達が喜んでくださっても、一番近くにいるスタッフの方々には大きな負担を強いてしまう。そして、結果として、行った活動に対する効用は下がってしまう。今回の活動では、計画的に動くことは、自分だけでなく、他の方々にも安心して、より良い活動となるために必要なことだと学んだ。

- ・継続したいことはこの活動そのもの。主催がどこかに拘らず、大学スポーツのヒトモノの資源を利用した復興支援は続けたい、続けてほしい。
- ・改善点としての提案は、仕事のプロセスの透明化や仕事の役割分担を明確にすること。今回は学生スタッフがかなり無茶ぶりなされた中で、懸命に取り組んだと自負している。事前準備の段階で改善できることは多々あるように感じる。
- ・能登の方との連携をもっと取っていくべきだと思います。現地に行くまでわからなかったことも多かったので、多くの方々から情報収集するべきであったと感じます。

以上